昭和二十年代中学校国語科単元学習の考察（4）

―「言語編」・「文学編」二分冊期の教科書単元の分析を通して―

山元悦子

一　はじめに―考察の意義とねらい

戦後、民主主義にのっとった新しい国語教育のありかたを提案する立場にあった人々は、その具体像を「単元学習」という概念で語ろうとしていた。その初期の形態は、昭和二十二年度学習指導要領国語科編（試案）に提示された「作業単元」（われわれの意見は他人の意見によってどう影響されるか）のような、問題解決にむかって様々な言語活動を行なうなかで、学力を養うことを目指したものであった。ところが、文部省が学習指導要領以前に世に出した最後の国定教科書『中等国語』は、購読本位の学習を前提としており、この点で教科書が期待する学習と指導要領が示した作業単元的学習との間には齟齬があり、両者の理論的整合性を求める要望は早い時期から浮かび上がっていったのである。この矛盾を整合性のあるものにすることは、当時重要な意味をもっていたと思われる。すなわち、この点を明確にすることは、国語科における新教育の具体像である「単元学習」とは何かを明確にする上でも、また「単元学習」における教科書とはどのようなものかを明確にする上でも、欠くことのできない課題であった。

文部省『中等国語』は、改定版から学習の手引きを巻末に付し、講読後の発展学習を示唆することでこの問題を解決させようとした。『中等国語』以降、教科書販売の自由化をめざして実施された検定制度における新教科書は、このような状況にあって、さらに改良を加える方向で編纂されたととらえられる。つまり、単元学習における教科書の機能について、各社それぞれ工夫をこらしていったのである。

本稿は、以上のような状況認識にたって、昭和二十年代の中学校国語科実践を実質的に左右したと思われる検定教科書を対象に、当時の単元学習の実態を追跡することにねらいがある。また経験を通して言語生活の学習をする単元学習法に、教科書はどのように関わるかについても考察したい。

なお、昭和二十四年・二十五年に出版された八種教科書の単元

については、『国語科教育』第三十六集（全国大学国語教育学会一九八八年）にその分析結果を報告した。今回の考察は、それを受けて、二分冊期の教科書を中心に分析を行なう。なお、今回の考察は中学校第一学年に絞って行なっている。

二　検定教科書の出版状況と二分冊教科書の成立背景

昭和二十年代の中学校検定国語教科書の出版状況は、表一の通りである。昭和二十四年にいち早く二社の教科書が出版されたのを皮切りに、昭和二十五年の第一期の出版ラッシュ、そして昭和二十六年の学習指導要領改訂を受けた昭和二十七年の第二期の出版ラッシュがうかがえる。また、各社の教科書形態の変化を見るならば、秀英出版の例に典型的にあらわれているように、一冊に教材と言語活動を組み合わせまとめたものから、言語教科書と文学教科書を分けて二分冊とする時期へ、そして再び総合化教科書へと移行していくのが一般的であった。

さかのぼってみれば、戦後最初の文部省編中学校教科書『中等国語』は、学習指導要領以前に作成されたものであり、単元学習に対する配慮のいまだ見られぬままに、石森延男氏のヒューマニズム精神にその基盤をおきながら選ばれた教材集であった。『中等国語』発行後に出された昭和二十二年度学習指導要領は、その編集に深く関わった輿水実氏によれば、〈当時、せっかく文部省の新しい教科書、石森教科書ができあがったばかりのところで、われわれとしてはこの教科書に織り込まれている新しい国語教育の精神を普及したいと考えていた。（略）コース・オブ・スタディが教科書を規定するものであることは、頭の中ではわかっていたが、実際は、なるべく教科書の妨げにならないように、教科書にはふれないようにした。〉という事情のもとでの作成であった。実際の学習指導要領においても、〈単元による方法は、児童生徒が解決しなければならないような問題をだし、児童・生徒が問題を解くときのすべての経験、到達した結論、達成した結果をまとめていくことであると定義できるであろう。国語教科書の一課一課も、じつは、そうした作業単元を考慮において編集されている。〉という記述の背景にほの見えているように、単元学習法と国語教科書の関連の問題は、成立の当初から不明瞭な問題をはらんだものであったのである。そこで文部省『中等国語』修正版（昭和二十三年）は、一課一文章の教材列挙集の域をでないものでありながら、巻末に学習の手引きを付す事によってわずかに単元的展開への道を開いていった。[注1]

このような状況のもとで昭和二十四年には、教科書の検定制度の開始にともない、最初の検定教科書二種―教育図書『国語』・文寿堂（後の秀英出版）『私たちの国語』が世に出されている。これは、昭和二十二年度学習指導要領や、その普及伝達のための指導者講習会などでの補足説明を受けて実案化されたもので、それらは、『中等国語』の工夫である「学習の手引き」はそのまま踏襲し、それに加えていくつかの教材をくくって「美しい自然」などの単元名を付して話題のまとまりをつけようとした点に、単元学習と教科書の関係についての理解のしかたがうかがえる。

しかし第一期検定教科書が生み出された状況は次のようなものであった。

＜現在の（検定）制度では、終戦後に文部省が作った教科書のまねをして出す以外に方法はない。もしなにか独創的な教科書を作れば、それは不合格になる可能性が多い。だから出版社が作らない。たとえば、学習指導要領や再教育講習では「単元」ということをいうが、もしほんとうに単元的な教科書を作ったら、現在の検定をパスしないであろう。なるほど、検定基準のはじめに「内容は学習指導要領に示されていることに合っているか」ということはいってある。調査員は、学習指導要領を読んで点をつけることになっている。ところがその指導要領の要点がはっきりつかめない。だから「文部省の教科書に似ているかどうか」ということが実際には最も大きな検定基準になっている。そして、ご承知のように、文部省の教科書は学習指導要領以前にできたものである。（略）今の教科書はどれも、まだほんとうに単元学習の精神で編集されていない。もっと一般的にいって、学習指導要領の趣旨を生かすには困難な悪い教科書が多い。その点から私は、新しい国語教育が確立されるためにはどうしても「新しい教科書が」作られなければならないし、そのためには、「新しい検定基準」が必要であると考えている。[注3]＞

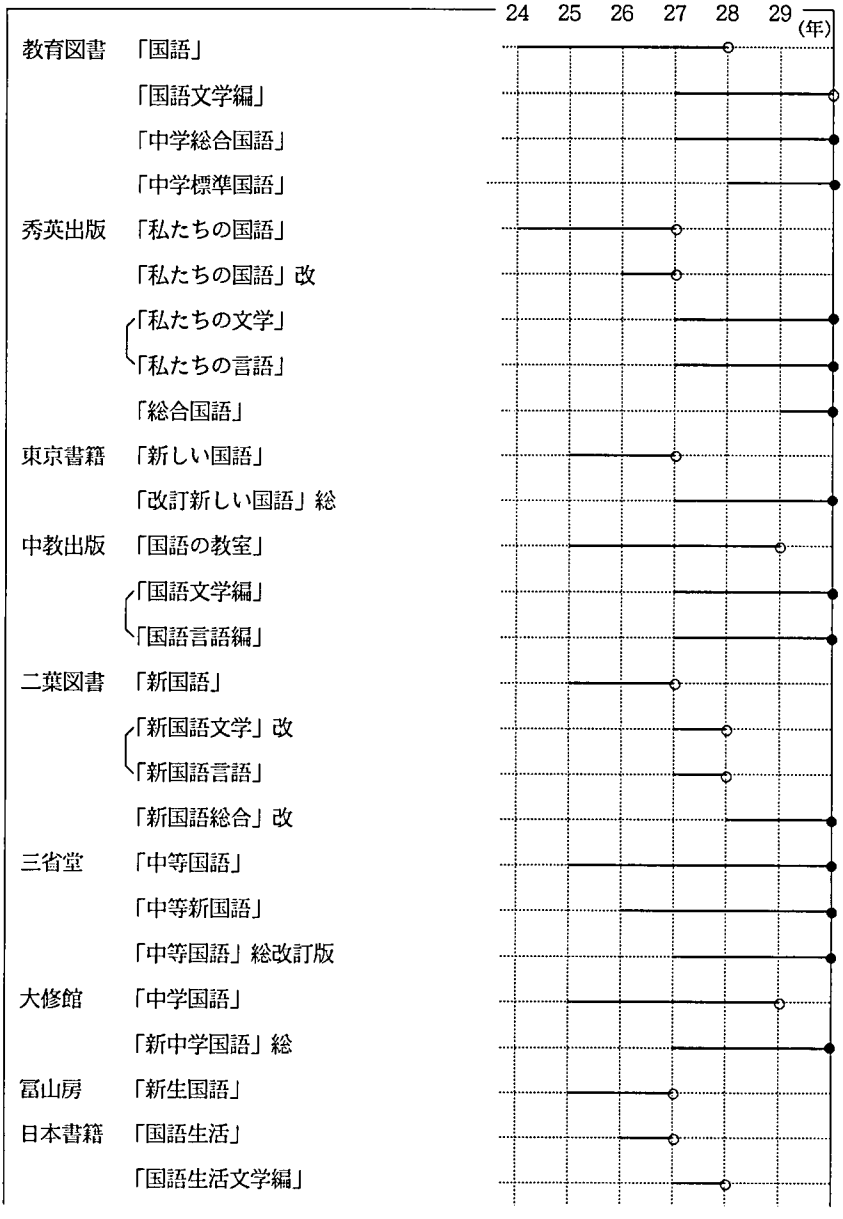
このような状況にあった国語教科書が、現在からみて、画期的に改変を遂げたように思われるのは、三省堂『中等国語』（昭和二十五年）からである。三省堂『中等国語』は、先に挙げた教材と学習の手引きの他、単元の取り組みへの指示（いわゆる単元の扉の言葉）や教材間のつなぎのことばを教科書にのせ、単元展開の実例を示すべく作られた最初の教科書であったととらえられる。[注4]

『昭和二十六年度中学校高等学校学習指導要領国語科編』は昭和二十五年までのこのような時代状況をにらみながら編まれており、本稿の考察の対象である『言語編』『文学編』二分冊期の教科書は、昭和二十七年度以降、この二十六年度学習指導要領を基準としながら次々と発行されていくのである。

その、基準となった昭和二十六年度学習指導要領では、「教科書は国語の学習に最も効果的に応じ得る資料集でなければならない」[注5]として、従来の文章規範集でも思想陶冶集でもない教科書観がうちだされている。また、「これからの国語教科書は、国語教育の目標を達成するに必要な経験を提供するものであり、生徒の発達段階に合っていて無理なく学ばれるものであり、興味をもって喜んで迎えられものであり、語いや漢字の負担についてじゅうぶんに考慮を払ったものでなければならない。」[注6]という指示は、教科書の教材配列構造に基本的な変化を与えることになった。すなわち、すでに三省堂『中等国語』にみられたような、単元の扉のことばによる動機づけ、教材間をつなぐことばや設問による展開的発展的な学習活動の提示、学習語彙表の付加によって上記のような要請にみあった単元教科書が現われてくるようになったのである。

それに加えて国語教科書が言語編と文学編の二分冊に分かれて編集されるようになったのは、学習指導要領の次のような記述の

表一　検定教科書出版状況



「国語　総合編」
学校図書　「中学国語」
「中等言語」
「中等言語」改
「中等文学」
「中学国語」総
「中等言語」改
「中等文学」改
市ケ谷出版「中学現代国語」
北陸教育書籍「新制中等国語言語編」
「新制中等国語言語編」改
「新制中等国語文学編」
光村図書　「中等新国語（文学）」
「中等新国語（言語）」
東陽図書　「ことばの生活」
「ことばの生活　言語の本」改
「ことばの生活　文学の本」
開隆堂　「新しい中学国語 文学」
「新しい中学国語　文学」改
「新しい中学国語　言語」
教育出版　「中学国語」総
修文館　「中学生の国語」総
実教出版　「模範中学国語」総
池田出版　「中等国語」

影響によるものと考えられよう。

＜国語の教科書は、学習資料を組織的に集成したものであるから、国語科として一本のものでもよいし、文学編・言語編などに分けたものでもよい。分けた場合でも、相互に密接な連関をもって、国語科の目標が果たされるようになっていなければならない。[注7]＞

この学習指導要領の作成に深く関わった奥水実氏は、『国語科教育』（昭和二十五年十一月発行）において、国語教科書のあり方についてさらに詳しく言及している。

＜進歩した国語教科書の基準としてわたくしが考えているものが三つある。

（a）単元ということを頭において編集され、各教材は作業単元の展開への媒介とする。／（b）いろいろの言語調査の成果に基づいて語彙の配当がなされ、科学的に編集されている。／（c）教科書と同時に教師用書や学習書が考えられ、全体として児童生徒の学習と教師の指導ということが十分に考えられている。[注8]＞

この発想の背後にあるのは、「昭和二十二年の秋であったか総司令部でヘッファナンさんから、アメリカの新しい国語教科書を見せていただいた」[注9]時に紹介された『ツーデーズ・ワーク・プレイ・ブック』『イージー・グロース・イン・リーディング』などのアメリカの言語教科書であったことが回想されている。

これらのアメリカの教科書に学ぶことにより、当時のオピニオンリーダー達に言語学習のための教科書の必要性が認識されていったようである。「言語編」と「文学編」の二分冊編集がなされはじめた意義は、このような事情を背景にして文学教材の読解を主要な目的とする国語教科書からの脱皮をはかり、「言語教科書」という発想で教科書を改めてとらえなおしたことにあるといえよう。

三　言語編教科書の実態

言語編文学編の二分冊を対として編集した教科書は、先の表一のように八社ほどあげられる。その内容を目次によって示したものが表二である。

これらの言語教科書は、そのねらいを言語知識・言語技術の系統的組織的学習におく点でどの教科書にも共通している。一例をあげると、次のような認識である。

＜国語学習の目標は、これらの知識内容を習得することよりも、その内容を理解したり、また、自分の感想を述べたりする手段方法の訓練にある。その学習が、人と人と通じあい、社会生活を円滑にすることのできる知識と能力を習得することになるのでなければならない。／では、こうした学習はいかにして達成されるであろうか。それは、いわば社会科の分野を受け持ち、理科や他の教科の分野に深入りするような学習を通しては、とても成就されることはない。必ず、特に組織された方法と、はっきりした目標が立てられているのでなければならない。国語の学習のために言

語教科書が作られるゆえんはここにある。〈（学校図書『中等言語』あとがき）

ここには、生活経験を国語学習に取り込むことによって、学習内容の希薄化・拡散化が生じがちであった昭和二十年代前半の国語科教育に対する反省のうえにたった改善意識が認められる。

しかし、このような言語知識・言語能力の系統的学習という立場も、具体的には各社各様の生かし方がなされていったようである。たとえば、各言語教科書の単元のくくりの実態を見ると、左の表のような類型があらわれてくる。

このように見てくると教科書の単元編成の原理は、生活を重視した学習活動本位の編集と、指導内容である言語生活言語技術の系統を重視した指導事項本位の編集の二極の間に位置し、その重

○話す・聞く・読む・書くという言語活動領域論にのっとって学習単位を定め指導を編成していくもの	中教出版『国語　言語編』
○折衷案1　入学間もない時期を捉えて「新しい中学生活」のごとき単元を設けながら、基本的には言語活動・言語技術を単位として配列するもの	二葉図書『新国語　言語編』 光村図書『中等新国語言語編』
○折衷案2　基本的には言語活動及び言語技術指導事項を配列するが、教材内容に中学生を主人公にした実生活に材を取ったものを盛り込むことによって生活重視の立場を生かしたもの	学校図書『中等言語』
○学習生活の時期と流れを配慮した言語経験を単位として単元配列をしているもの	開隆堂『新しい中学国語　言語編』

表二―一

秀英出版	中教出版	二葉図書	光村図書
私たちの言語 一	国語言語編 一	新国語言語 中学一年	中等新国語言語編 一年
一 生活と言語 (1) 新しい経験 (2) ことばの作り方 二 日記 (1) 作文と感想文 入学式の朝〈学生 きょうから中 / ぼくは中学生〉 こだまする野べ (2) 風の子 (3) 日記の書き方 さし示すことば 三 読書のくふう (1) ポチ (2) わびしい旅宿に即興曲 (3) 南京のつぼ 四 通信文 (1) はがきと手紙 むかえの打合せ 時候みまい (2) 清からのたより	話し方と聞き方 一 大意の述べ方 二 会話のしかた 三 電話のかけ方 読み方 一 文字 二 国語辞書の引き方 三 漢和辞書の引き方 書き方 一 ありのまゝに書くこと 二 日記のつけ方 三 手紙の書き方 四 送り仮名 五 いろ〳〵な符号の使い方 くぎり符号の使い方 繰り返し符号（踊り字）の使い方 六 原稿用紙の書き方 付録 一 国語辞書の組み立て 二 漢和辞書の組み立て	一 新しい中学生活 中学生 入学のよろこび 二 日記をつける 日記の書きかた クラス日誌 中学生日誌 本読み日記 出発の日 三 表記法 文章の符号 気持を読みとる 原稿の書きかた 四 ラジオ 放送の種類 ラジオ・ニュースの聞きかた 学校放送 放送番組のきまるまで 五 放送「ことばの講座」 ことばの表わしかた 文の組み立て	一 国語の学習 (1) 自己紹介 (2) 国語の学習のしかた (3) 国語学習の目あて (4) ノートや答案の書き方 二 辞書の使い方 (1) 辞書を利用しよう (2) 字書の使い方 (3) 辞書の使い方 (4) 動詞と形容詞 三 日記や記録の書き方 (1) なぜ日記を書くか (2) 日記はどう書いたらよいか (3) 記録の書き方について 四 話しことば (1) 正しい発音 (2) ふだんのことばづかい (3) 書きことばと話しことば 五 ラジオの聞き方 (1) 国民とラジオ (2) 番組の選び方

(3) ぼくの反省
人のよび方
五 説明と問答
(1) 考えることもたち
(2) なぜ〈問答
(3) 上野図書館へ
六 劇
(1) けいこ
(2) 魚のうでじまん大会
つなぎのことば
七 放送
(1) ラジオの聞き方
(2) あいさつ
八 よい国語
(1) 敬譲の言い方
話しことばと書きことば
注意すべきことば

監 麻生磯次
編 市古貞次
江湖山恒明
大野茂男 他三

三新旧字体対照表

日本文法一覧国語編

著 時枝誠記

文をつなぐことば
六 辞書を調べる
音引き
「米をたく」と「飯をたく」
画引き
七 学級新聞
学級新聞の作りかた
新聞の見出し
八 口・耳・目とことば
ことばの音
話しことば
書きことば
九 調査のしかた
十 方言と標準語
東ことばと西ことば
方言
標準語
注
付録 いろいろな符号のつかいかた
索引

編 岩井良雄
熊沢龍

(3) ラジオの聞き方
六 読書
(略)
七 手紙の書き方
(略)
八 脚本の読み方
(略)
九 文集の編集
(略)
十 ことばのきまり
(略)
学習のために
口語の動詞・形容詞
当用漢字別表(総画引)
単元対照表
事項索引

著 垣内松三
協 安藤新太郎
石森延男
栗原一登
奥水実
八木橋雄次郎

表二―二

学校図書	北陸教育出版	開隆堂
中等言語一	新制中等国語言語編 第一学年用	新しい中学国語言語
文の組み立て 一　文章を書く 二　わたくしのやり方 三　くぎり符号（句読点） 調査研究 一　図書館 二　図書館の利用法 三　よい本の選び方 しらせ 一　掲示の読み方 二　ポスターを書こう 三　雑誌を読む 四　楽しい新聞 五　よい新聞とはどういうものか 理解と鑑賞 一　読書／二　読書の方法／三　要領筆記（ノートのとり方） 四　シャベルつるはし 五　詩の鑑賞―とうきび	一　会話のしかた 二　講演や講義の聞き方 三　要約や概略の書き方 四　辞書や参考資料の使い方 五　詩の読み方 六　物語や小説の読み方 七　日記の書き方 八　ラジオの聞き方 九　劇の見方 十　随筆の読み方 十一　学級新聞やクラス雑誌の編集 十二　研究や調査の発表のしかた 十三　図書の選択と図書館の利用 十四　掲示・広告・ポスターの書き方 十五　くぎり符号の使い方 付録 一　言語編・文学編対象表 二　当用漢字表 三　現在かなづかいの要領 四　送りがなの付け方	Ⅰ　新しい生活 単元1　新しい友だち よい友だちの条件 紹介のしかた よい会話 教育漢字の練習1 単元2　経験を発表しあう話題と記録発表と表現 文法の研究1 教育漢字の練習2 単元3　新しい生活を知らせる手紙の書き方 会話のしかた 文法の研究2 共通語と地方語 教育漢字の練習3 Ⅱ　考えを深めよう 単元1　よく観察する さまざまな観察 文法の研究3
		単元2　読書クラブを作る 発表会を開く 朗読 ポスターを書こう 文法の研究9 アナウンスのしかた 読書討論会 発表会のあとで 教育漢字の練習8 単元3　文集を作ろう 文章の種類と形式 さまざまな文章の作りかた 文法の研究10 推こうを忘れない 鉄筆の使いかた 教育漢字の練習9 付録　1　くぎり符合の使いかた 2　外国の地名・人名の書きかた 3　くりかえし符合の使いかた

六　文章の研究―トロッコ
七　俳句の世界

劇をしましょう
一　とらお君の脚本
二　脚本を書こう
三　映画と演劇
四　昔の日記
五　日記・記録の書き方

ラジオと会話
一　ラジオの番組
二　前畑がんばれ
三　ラジオの放送（1むずかしい放送、2話し方）
四　会話
五　楽しい会話―真情をこめて―
六　ことばのなまり―（発音が違う）

口語のきまり
一　言語とはどんなものか
二　文法
三　文・文節・単語
四　品詞にはどんな種類があるか
五　名詞と代名詞
六　動詞
七　形容詞と形容動詞
八　副詞と連体詞
九　接続詞と感動詞

監　辰野　隆
　　久松　潜一

編　戸板康二
　　吉田澄夫
　　渡辺　修

教育漢字の練習4

単元2　読書と知識
　書物の読み方
　あらすじの作りかた
　索引の利用
文法の研究5
　辞書の引きかた
文法の研究6
　単語の正しい使い方
　読後感
教育漢字の練習5

単元3　発表力をのばそう
　文の書きだし
　文章の組み立てと変化
　文書の結び
　文章の題のつけ方
文法の研究7
教育漢字の練習6

Ⅲ　書物を友として
単元1　楽しむために読もう
　書物の選び方
　雑誌の読み方
　はやく読む価値
文法の研究8
　書物をどう取り扱うか
　読書と照明
教育漢字の練習7

索引
この教科書の学習主要目標一覧
この教科書で指導なさる先生がたと原作者のかたがたへ

編　平井昌夫
　　上甲幹一

協　日吉透雲
　　長田和雄

点のおき方によって各社のバリエーションが生れているといってよいであろう。

中教出版『国語　言語編』の場合のように言語教科書の一方のありようとして、「〜のしかた」というかたちで構成し、いわば

中教出版『国語　言語編』の場合（内容の略述）

版の場合は、法則や技術を教えてから経験させてみる演繹的学習

話し方と聞き方
話すことの意義についての解説文＜学習への動機付け＞
一　大意の述べ方
○　大意を述べるときの心構え五項目及び練習（文章を読んで大意を述べてみよう）
○　研究と練習（例文について朗読、発音練習、大意把握。別の例文についてメモを取りながら聞く、メモを見ながら話す。発展的に一日の出来事を順序を考えて話してみる）
二　会話のしかた
○　会話をするときの注意事項の列挙
三　電話のかけかた
○　電話をかけるときの注意
○　研究と練習（電話にでて困った経験を話し合って見よ。他三つ）

便覧・参考書としての教科書の存在様式が考えられる。が、言語をその働く場とともに教えることを尊重するならば開隆堂『新しい中学国語　言語』のように学習活動にそった構成と実経験の配列という学習活動そのものを提示するいきかたも可能であろう。この二極の典型事例である上記二種教科書の学習は次のようになっている。

この両者の単元内構成の相違を端的に表現するならば、中教出

開隆堂『新しい中学国語』の場合

単元1　新しい友だち
よい友だちの条件　よい友だちになるにはどうしたらよいか＜学習への動機付け＞
学習活動1　よい友だちの条件を個条書きにしてみよう

学習活動2　自分が先の条件に当てはまるかどうかよく反省して、それぞれの項目に○×をつけましょう

学習活動3　よい友だちの条件としては次のようなことが考えられる。めいめいの考えついた条件と照らし合わせてみよう

学習活動4　3の20項目に自分達が考えたことをつけ加え、似通った項目があったら、「清潔」「温和」というように短い言葉でいくつかの大きな項目にまとめてみよう

学習活動5　次のことに気をつけて見やすい表にまとめよう

(1) ほかの人にもよく読めるような文字を書く。

(2) うそ字や自分だけのくずし字を書かない。

(3) 「きょう」の「ょ」や「いった」の「っ」のような拗音や促音をあらわす「かな」は小さく右側に書く。

(4) たいせつな部分には横に線をひいたり点をつけたりする（以下略）

学習活動6　「点」や「まる」などのように、文を読みよくする符合を「くぎり符合」といいます。このほかに「くぎり符合」としてふだん使われているものにはどんなものがありますか、いままでに使ったことのある経験から考えてみましょう。

注　意　くぎり符合の使い方については、巻末の付録を見て、そのときどきの使い方によく慣れておくことが必要である。

紹介のしかた　学習活動7～11（略）

よい会話　学習活動12～22（略）

教育漢字の練習1　（先の教材とは無関係に一～米までの五五字が提出されている）

法であり、開隆堂の場合は経験させてから導く帰納的学習法であるということであろう。帰納的学習法の場合、体系性への見通しがつけにくく、経験を一般化する必要があるという問題点があり、一方の演繹的学習法の問題点は、逆に教えたことが具対面への適応に転化されるかどうかということにある。二分冊期の教科書群の多様なあり方は、このような国語学習上の問題を浮きぼりにするように思われる。

また、このような教科書の性格の揺れの問題をさらに基本にたちかえって考えるならば、教科書の指導性をどう定位するかということにたちもどらざるを得ないように思われる。言いかえるならば、教科書が実際の学習活動にどのように貢献するかという問題である。開隆堂の目指したように、生徒の問題意識を大事にし、それにそって生活に根ざした経験学習を展開させていく原理をさらに徹底するならば、それは教科書の用意された学習活動を一つ一つたどっていく学習法とは根本的に乖離していかざるを得ないであろう。つまり、国語学習を生徒の実生活に材をとった経験主義に徹するならば、教科書はあくまで資料集として貢献するほかないのである。

しかし、そのような経験単元学習の場合、語彙や漢字の系統的指導や文法の体系的理解をどこで保障するかという問題、すなわち経験で得た知識を一般化体系化する機会・自覚的練習による習熟の場が問題となる。また逆に、それを重視して、教科書が言語技術（〜のしかた）の解説と練習問題を提供することに力を入れた場合、生徒の問題意識にねざし、生活経験を通して学習する「カリキュラム」を、教師が自力で教科書とは別に用意する必要が生じてくるのではなかろうか。実際、言語技術の解説に重点を置く教科書の場合、対応する文学教科書がそのようなカリキュラム提供の機能をあわせもってくるのである。

Ⅳ　言語編教科書と文学編教科書との関連

先の中教出版及び開隆堂の場合を例にこの点についてさらに考えてみたい。次頁に両教科書の目次を示した。

経験学習本位の言語教科書に対応した文学教科書は、開隆堂の場合言語編の目次と対照させてみると、独立して編成されている観が強い。文学編教科書は、言語編教科書に用意された学習活動の資料として用いる意図は少ないといえよう。

一方、中教出版『国語　文学編』目次を見ると、中教出版の場合、単元二・三・九などの言語編との関連が明確なものと、いわゆる言語教材六・十八、言語生活に材を採った単元一・五、そして分量的に最も多い、文章ジャンル網羅をねらった文章群が混在している状況である。この教科書の場合、言語編文学編のいずれも基本的に、単元の学習指導過程づくりは指導者の裁量に任せ、学習の資料を提供する姿勢が見られる。実際に扱う場合はおそらく、文学編を軸として、言語編をサブテキスト風に用いやすいのではなかろうか。ただし、その場合そこで行われる学習は、文学編教科書が問題を立てた単元構成でないために非常に静的で、文学鑑賞ないし文章読解と、言語技術の訓練学習が主要な内容にな

開隆堂『新しい中学　文学』目次（昭和二十九年より使用の改訂版）

Ⅰ　明かるい生活
一　フェア・プレー＜詩＞
二　てんぐ笑い
三　白
四　かささぎの卵＜劇＞
テスト例
Ⅱ　さまざまな世界
一　ローレライ
二　八太郎のわし
三　山の詩＜詩＞
1　山の歓喜
2　裏山小山
四　詩の味わいかたと作りかた
テスト例
Ⅲ　暖かい心で
一　やまどりのおかあさん
二　にれの町＜散文詩＞
三　氷原を走る犬ぞり
四　一ふさのぶどう
母とふたりで・けやき＜詩＞
テスト例
Ⅳ　正しい考えを
一　なぞを解く喜び
二　しょうじょうばえ
三　人間エジソン
テスト例
学習の反省／この教科書にでているおもなことば／筆者紹介／この教科書の学習目標一覧／この教科書で指導なさる先生方へ

中教出版『国語　文学編』目次

詩　明るい花
一　最初の授業
詩　鉱業
十　リンカーンの逸話（伝記）

二　少年の手紙（手紙）
三　その日その日（日記）
　(1)　日記
　(2)　生活の記録
四　季節の足音（報告）
五　家庭生活の調査（報告）
　詩　海
六　言葉の不思議（序文）
七　なぞを解く喜び（評論）
八　心の幻燈（評論）
九　電話のかけ方（解説）

十一　ガリレオ（伝記）
十二　ポチ（小説）
十三　クオレ（小説）
十四　二百十日（小説）
十五　四つ辻のピッポ（劇）
十六　言葉の旅（随筆）
十七　心のこみち（随筆）
十八　文章について（論文）
十九　小人の森（小説）
二十　白（小説）
　注

るであろう。もし、この二分冊教科書を用いて経験単元学習を進める場合は、両教科書にまたがりつつ、教師が独自に設定した単元カリキュラムが別に必要であるように思われる。

VI　単元学習と国語教科書

「言語編」「文学編」教科書の二分冊というのは、単元学習という経験主義教育観にたった学習指導における教科書のあり方を模索する、いわば第二段階であった。それはまだ過渡的な状態であり、多くの問題もはらんではいたが、次のような点で、その意義が認められよう。

その一つは、センテンスメソッドを主体とする教材作成原理の中に、語彙提出や、文法指導などの言語指導としての系統性や提出順序の合理性を配慮していこうとしたことである。また、そこに取り上げられた文章自体も、精緻な文章研究に耐える名文から、現実生活に存在する文章へと採用方針が変革しているのである。

またこれは、より本質的な変革であるが、言語教科書と文学教科書と文学教科書間の取り扱いをめぐって、教科書の学習指導過程における位置そのものの問い直しがなされたことも見逃すことはできない。つまり、それぞれの教科書にどんな役割を担わせるかの検討を通して、教科書を資料提供の手段として存在させる立

場や、教科書が単元学習指導の過程まで提示してみせる立場まで、教科書の教室における機能自体が模索されているのである。

単元学習法における教科書のあり方の問題もこの点に集約できるのではなかろうか。そもそもアメリカに学んだ単元学習の基本的な概念は次のような三点を基軸にすえたものであった。まず、方法理念として、なす事によって学ばせる経験主義を掲げ、問題解決過程を指導過程の基本におくものである。そしてその教育目的は、現実社会生活へのこどもの適応能力をつけることにある。その教育目的から導かれる教育内容とは、現実社会の各場面各要素の分節を単位とするものであり、こどもの興味や発達段階を考慮しながらそれらはカリキュラム化される。このことからわかるように、単元学習とは、基本的に各科教育の立場ではなく、コアカリキュラムを念頭におくと理解しやすい、汎教育的な概念なのである。

そのため、国語科の存在を大前提にして、その範囲内で教育内容と方法を具体的に詰めていく立場としては、単元「生産と消費」などの例で紹介される、単元学習における指導内容をいかに国語科的なものに読みかえるかという指導内容の問題と、あるテーマをもとに問題を解決していく学習形態を国語科にどう生かすかという指導方法の問題が起こってくる。

この問題は、一般的には、次のように消化されていったと捉えることができよう。すなわち、国語科における指導内容を、「現実社会」の国語科的局面である「言語生活」の各分節とし、言語生活の運営に必要な様々な言語経験を学習内容にすえていく。（これは指導「単位」と称された）また、その指導方法として学習の動機付け—学習活動—評価を基本軸とし、児童生徒の興味を重視し個人差に応じることを条件とした学習が示されたのである。（これを作業単元学習と称することもあった）また、これは問題解決学習と比べて問題意識の持ちかたが穏やかな話題提示学習をも容認する点で国語科独自の受容といえよう。そして、それらの改変的受容は当然のことながら国語教科書の変容に反映されていく。

その一方で、Language Arts に重点をおいたアメリカの教科書の紹介を通して日本の国語教科書に言語スキルの系統的訓練的学習の側面が強調して吸収されたことも見逃せない要素である。

つまり、「言語編」「文学編」の二分冊構成の教科書は、以上のような社会状況・理論的整合性を求める立場から二分冊という存在様式と内容編成原理とを生み出していったといえよう。

この国語教科書編集史上の大きなうねりを肌で感じ、それを推進あるいは、批判する立場にあった人々は新教育における「新しい国語教科書」のあるべき姿をどのように捉えていたのであろうか。

新教育推進の渦中からは一歩離れ、独自の国語教育の問題史的展望にたって、言語生活主義の国語教育論を構築していた西尾実は、次のようにいう。

＜国語の教科書も、（略）理論としては、学習資料であるべきだといいながら、実際においては、それは、単なる資料集などではない。そうかといって、戦前のそれのような読み方本位の読本で

もない。話しかた・聞きかた・書きかた・読みかたのすべてを含めた、関連学習指導書を志向している。わけても、行き届いた国語教科書は、それぞれの学年における教育計画を立て、単元を定め、それに必要な資料を集め、さらに学習の方法をも導くというような組織をとり、それまで、教科書と呼びならわしてきた在来のものに対すると、これらは、学習指導書と呼ぶにふさわしい仕組みでさえある。そういう組織のよくできたものが、教育の現場に、最も多く歓迎されるところに、戦後における国語教育の方向と実質が認められる。∨

∧これからの国語教科書は、戦前のような読みかた万能の教授用読本でもなく、また戦後のような、話し・聞き・読むための関連的な学習指導用書でまなく、あくまで、話し・聞き・読む働きの独立と関連性とを、実践的に定位したうえでの、読むことの学習資料でなくてはならぬということになる。が、それには、話し・聞き・書く学習は、教師と生徒の、具体的、現実的言語生活の場において、適切な学習がじゅうぶん行われることを前提としての立言であると、くりかえし言ってきたとおりである。いまのように、話し・聞き・書き・読む言語生活が、関連的に学習されなくてはならぬと言うことが、ただ、もたれあいになってしまって、なに一つ徹底した独立学習ができないでいる現状は、まことに困ったものである。∨

西尾氏は、教科書が紙にかかれた文章である以上、それは、あくまで読むことの学習資料[注10]にすぎないという立場を取る。そしてそれ以外の聞く・話す・書く指導に関して、「現実的言語生活の場において適切な学習」を「じゅうぶんに行」わせるためのテキストについてはここには言及がされていない。われわれはここのところを補って考えるべきであろう。なぜならば、新教育の理念にもとづいて唱えられた単元学習も、ふたをあければ多くは教科書に依拠した実践であった当時の実情を考慮[注11]すれば、国語科の教科書に話し、聞く・書くことの指導への配慮が失われた場合、その指導が細っていくのは必然であり、それは、例えばその後の話しことば学習の衰退という歴史上の現象を見ても明らかであろう。「適切な学習がじゅうぶん行なわれる」ためにも、指導内容の拡大にともなう教科書観の変容が必要であると思われる。

この点に関して、当時、新しい国語学習と国語教科書のあり方を伝達講習会などを通して広くといていた輿水実氏は、次のように述べている。

∧文学編教科書というのは、従来の小学校の「読本」の系統に立つ教科書である。言語編教科書というのは、言語生活への反省、言語知識特に文法知識の習得、および、聞く、話す、読む、書くなどの言語技術の習得をねらった教科書である。これは以前の「文法教科書」の拡大、拡充であり、小学校における言語教材の独立であるわけである。（略）さて前節のセンテンス・メソッドと教科書との関係、特にセンテンス・メソッドによる教科書においては文字、語句の提出に本質的な困難があるという点から国語学習指導の将来ということを大胆に予測すれば、現在のワーク・ブックのようなものを本体とし、今までの読本系統の教科書というものは使わないようになるのが、自然の傾向ではないかと思わ

れる。[注12] ＞

輿水実氏は、従来の「読本」への批判を下敷きに、言語スキルの系統とそれを練習訓練する機能を強くもった教科書の出現を予想している。西尾氏とは逆の方向である、言語編教科書の発展という教科書発達を描いているといえよう。

両氏の論述を考慮しながら、戦後新教育の具体像である「国語科単元学習」における教科書のあり方について考察したい。

両氏が否定している「読本」教科書は、国語科教育の指導領域概念の拡大にともないその不十分さを多くの人が指摘するところとなった。これを言い換えるなら、国語科の指導内容を全般にわたってカバーする教科書は、もはや紙の上に書かれた文章にとどまらない概念になりつつあったということであろう。その広い概念をかりにテキストといいあらわすなら、単元学習におけるテキストは、「正しく良質」であることを基本的性格として書かれた文章（本）であり、教師のプリントであり、カードであり、テープ・ビデオなどの視聴覚材であり、教師のことば自身であるといった多角的な認識を要求するものに必然的に移行していくことになると思われる。しかもそれだけでは十分ではない。テキストは、次のようなものの補助を待って有効に機能することとなる。

○ テキスト理解の基礎となる言語技術の定着をはかるワークブック

○ テキストを運用するための指導計画・指導過程の実例案を提供する指導書

○ 学習の動機づけや、学習の深化・発展のそれぞれを支える参考書・資料

このような新しい教科書観ともいえる＜テキスト及び補助資料＞認識は教科書発達史上の転換点を示すものであるといえよう。また、経験主義単元学習が、徹底していくためには、このようなテキスト概念の拡大と周辺の補助資料物の充実が、行政的にも経済的にも保障されることが必要であったのである。

以上のように昭和二〇年代（特に昭和二十七年まで）の中学国語教科書の推移をたどると、単元学習概念の導入により、教科書概念の拡大がもたらされ・教科書を支える補助物の充実が求められていったことが明らかになる。「言語編」「文学編」の二分冊期教科書は、理想的な単元学習教科書を模索する段階で生じた産物であり、その目指す方向を少しづつではあるが実現しようとする過程で、教科書そのものの問い直しを促す歴史的な事象であったといえよう。

（広　島　大　学）

注1　輿水実『昭和国語教育個体史』p. 149 1990年渓水社

2　文部省『昭和二十二年度学習指導要領　国語科編』P. 147 1947年

3　同1　P. 144　これは昭和二十五年のはじめの講演筆記「学習指導要領とはなにか、及びそれと教科書との関係」の再録である。

4　拙稿「昭和二十年代中学校国語科単元学習の考察(2)—教科書の単元編成の実態を中心に—」（『国語科教育』第三十

六集　1988年）参照

5　『中学校高等学校学習指導要領国語科編（試案）』P. 267

6　同右　P. 267

7　同右　P. 281

8　『国語科教育』有朋堂　1950年11月（引用部分は、「進歩した国語教科書の要件」『教材研究』昭和二十三年九月号の再録である。）本文は輿水実自選著作集X　P. 192 による。

9　同上　P. 196

10　西尾実「新しい国語教科書のあり方」『国語と国文学』P.69・70　1951　7月号　東京大学国語国文学会

11　拙稿「昭和二十年代中学校国語科単元学習の考察(2)―教科書の単元編成の実態を中心に―」（『国語科教育』第36集　1988年）参照

12　輿水実『国語科教育学』P. 108~109　1955年金子書房（引用は輿水実自選著作集Ⅶ　による）